

青春放浪

檀 一雄



青春放浪

一九八六年四月二十四日 第一刷発行

著者 檀一雄（だん・かずお）

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八 ㊟二〇二一九一

電話東京二九一―七六五一（営業）

二九四―六七一一（編集）

振替口座六一四一二三

装幀者 安野光雅

印刷所 三松堂印刷株式会社

製本所 株式会社積信堂

ちくま文庫の定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

©KAZUO DAN 1986 Printed in Japan

ISBN4-480-02052-7 C0193

ちくま文庫

青春放浪

檀 一雄



筑摩書房

青春放浪

尾崎一雄さんに、「なめくじ横丁」という作品がある。この小説は主として、尾崎さんと私が、不思議な同居生活(?)をしていた時期を中心に書かれたもので、忘れていたことと思い出したところもあり、どうにも記憶にかえって来ないようなところもあった。

尾崎さんの小説は、人生調とでも云うか、例の通り淡々とした書きぶりで、時々顔を出してくる私自身の恥ずかしさを別にするならば、なつかしい読物であった。

私も、時々は乞われるままに、その「実名使用小説」というものを書きなぐる事がある。しかし、いつも、書き終って、愉快に思ったためしがない。

何にかしら、書かずもがなのいやらしさがにじみ出してくるようで、同じ刺身庖丁を使っても料理人と強盜程の相違がありそうだ。これは人に云われたことで、何も自分で卑下しているわけではない。

つい、先程のことである。私は五年振りに尾崎さんを下曾^{しもそ}我が家に訪ねて行った。用件もあるにはあったが、久方ぶりに、誰か旧知の人を訪ねて見たかった。

と云うと、私の身の廻りでは坂口さんか、両尾崎さんのどちらかか、或^{ある}は浅見さんとも云うことになるだろう。

坂口さんをどうしても一度は訪ねなければならぬところだが、どうも桐生に行くのは

途中が嫌だ。雷門からの電車の雑沓ざつこうのありさまを考えると出向く気がしない。三時間の棒立ちは憂鬱になる。

それに、私の胃の腑の状況が甚だ低下している今日、酒を殆ど口に出来ないのである。坂口さんと私が、一滴の酒ものまずに、にらめっこをしていたら、一体どんなことになるか？

私は、論なく尾崎さんのところに行こうとそう思った。手土産は奥さん向のドラ焼と羊羹かんで済むではないか。

昔は、出門見鬼けんきのような兇悪犯人が、甲斐甲斐しくドラ焼を携えて、静かに病む人の枕ちん頭を見舞ったなら、これは、そのまま美談に近い。

太宰が大声をあげてほめてくれそうな出来事だ。

私はD社の池内社長と、同じく水田三郎と落ち合って、新橋から沼津行列車に乗り込んだ。生憎あいにくと土曜である。

相当の混雑だ。選りにも選って、何故土曜などに思い立ったのか、馬鹿馬鹿しい限りであるが、それでも横浜からようやく坐る。

国府津こふづから、御殿場線に乗りかえた。私の横にはカツギ屋風情の中年女が二人いる。不態ささまに足を前の座席の方へ投げ出して、着物の裾を腿の辺りまでまくり上げ、自分の太股をつねったり、叩いたりしながら盛んなお喋しゃべ言りをつづけている。ガラリと変った列車内の地方色を今更のように面白いものに思いながら、しきりに富士の姿を探したが、雨にでも

なりそうで、山の姿は見えなかった。

列車を降りたとたんに、ポツポツと雨になる。多寡^{たか}をくくって歩きはじめると、

「檀さんでしょう？」

同じ列車から降りたった、色の白い洋装のお嬢さんから声をかけられた。

「はい。あなたは一枝さん？」

とまどいながらも、思い切って問うてみると、果して尾崎さんの長女一枝さんであった。

それにしても大きくなったものである。何とはなしにまるで、自分の手で育てあげた子供のようなほこらしさを感じたのは、二歳の一枝ちゃんを、よく知っているからのことに相違ない。

すると、あの頃は、もう何年の昔になるだろう？ 十八年か？ 十八年昔の一枝ちゃんの姿が、今見るように、眼の先にチラつくように思われた。

「さあ、一ちゃん。東京音頭を踊ってみて御覧。東京音頭——」

オドリオドルナーラ

尾崎さんが眼を細めて、そう云うと、立ち上ったばかりの一枝ちゃんは、尾崎さんと奥さんと二人して歌う東京音頭の節につれて、その腰を面白くゆすぶって見せたものだ。

もう一つ——。この一枝ちゃんについて、はつきりと記憶に残る出来事がある。

尾崎さんも、奥さんも、何かの用事で出掛けてしまって、私と一枝ちゃんと二人だけで

留守居をうけたまわったことがある。

数え年二つの女の子と、二十三の大学生が、二人だけで仲良くお留守番をしたのだから、如何に私が子供の遊ばせ方が上手であったかと云うことはわかるだろう。それとも一枝ちゃんがおとなしかったわけか。

私はこんな時にはいつも、家のガラス戸を全部閉めた。

その次に、危険物を全部一枝ちゃんの手のとどかないところに隠してしまうのである。それから先はもう本人のやりたい放題。なるべく枕とか、簞とか、衣類とか、本とかを、彼女の身の周りに雑然と散らしておくに限る。

さて、私は二階（ここが私の部屋だった）へかかっている階段の、下から三段目に腰をおろし、彼女が、

「ワウワウ」と云えば、

「ワウワウ」と答え、

「チャッチャッ」と云えば、

「チャッチャッ」と答える。

面白い間は、彼女の挙動を見ているし、あきれば、煙草をくわえながら、読書に耽る。

私のところ迄い上れば、私は遊びながら一段降り。また一遊びして一段降り。また一遊びして元のところへ戻す。これが肝腎だ。

一挙に下へ連れ戻すと、彼女は降ろされたと知って泣くのである。

彼女は機嫌よく再び階下の部屋を、歩き廻り、匍い廻り、枕をころがし、チリタタキを振って見せ、雑誌を破り、新聞をモミクタにし、障子に穴をあけ、再び、

「ワウワウ」と呼び、

「チャッチャッ」と呼ぶから、

「ワウワウ」と答え、

「チャッチャッ」と答えて、

彼女も上機嫌であるし、私も上機嫌である。

私と彼女の間柄は、つまり、当世めかして云えば、絶対平和主義であったから、お互に個性と人格を尊重して、己おのれの分を尽したと云えるかも知れぬ。

この居心地のよい均衡と平静を破ったのは、外ならぬ二歳の彼女の側であった。

私は例の通り階段の下から三段目に腰をおろして、煙草を吸い、「酩酊船」か何かを読みさし読みさし、勝手な妄想に耽かゝっていたらう。

と云うのは、彼女が何をやっているのか、皆目かいもく知らなかったから。

ただ、至極満悦そうな「キャッキャッ」という笑い声だけがしきりに足許で聞えていた。突然ゴトンという音がおこり、

「ギャッ」

という彼女の声、つづいて火のついたような泣声がはじまった。驚いたのは私である。はじき出されたように、飛び降りていってすぐその彼女を抱えあげた。

右の眼から血を噴いている。血まじりの涙が、頬一杯に流れ出していた。

「これはひょっとすると失明ではないか？」

そう思うと私は足腰がカタツイてかなわなかった。

その場には蝙蝠傘と塵叩きちりたたきが転がっている。その蝙蝠傘を下から彼女が、塵叩きでチョンチョンとつつき上げたものに相違ない。こんな事が起り得るとは夢にも想像の出来ないことだった。

なるほど、階段を降りつくしたところの釘に、蝙蝠傘がかかっていることは知っていた。しかし、彼女が壁にもたれて立ち上っても、どうしても、とどく位置とは違っていた。

その蝙蝠傘を、塵叩きでつつき落したわけである。蝙蝠傘の先金がマッシングラに彼女の眼の中に落ち込んで行ったものだろう。

私は青くなりながら、しっかりと一枝ちゃんを抱きしめて、辻村病院迄走っていった。普通の医者のところには行きたくない。かけ引きの無い彼女の眼の状態が聞いてみたかった。

場合によっては、帝大病院にでも担ぎ込むが、駄目ならどうする？

そう思うと、いても立ってもいられないような気持であったことを、今でもはっきりと覚えていいる。

「いや、大したことはないでしょう。十日もすれば治るんじゃないですか」

辻村さんは念入りに診察しながら、落ち着いた声でそう云った。それでも、赤ん坊が眼

帯をかけて、急にションボリと、如何にも出来事の不思議さに驚いているような表情を見ると、帰る道すがら、尾崎さんにどう説明してよいものか、ほとほと弱りつくした。

その道すがらの困却の気持だけを覚えていたのに、帰りついた時の、当の尾崎さんや、奥さんの言葉や表情をまるっきり思い出さないのは、どういうわけだろう。

人間は当惑した状況は覚えていたが、その解決した平凡な状況はこれを忘れてしまうのかもしれない。多分あの時は、

「いいですよ、いいですよ」

といつも通り、眼を細めて、尾崎さんから云われたものだったろう。

二三日するうちに一枝ちゃんの角膜の中には、かなり大きな真赤なシミが出来てきた。そのシミは拡がるばかりのように感じられてたしか一月近くも消えなかったように覚えている。

これが、ひくものかどうか、甚だ気が揉めたことは、今でも何となく忘れがたい思い出だ。が、その消えていった状況のところは、——例の平凡な解決を忘れる習性によったのか——まるっきり記憶にない。だから、今の今、あの時の蝙蝠傘の痕ですよ、などと云われれば一体どんな気持がするだろう。

あの時の一枝ちゃんが、こんなに大きくなってしまったとは思議であつた。私はその一枝ちゃんと肩を並べて歩きながら、それとなく、その右の瞳の奥の辺りを覗き込んでみ

たが、何の異状も感ぜられないように思われた。

「きつと檀さん。この汽車だと思って、私、学校を早退はやびきして帰ってきたんです」

一枝ちゃんは云っている。「きつと檀さん」と名詞切れになるその呼び方が、お母さんの松枝さんとそっくりの呼び方に思われた。それとも、声の類似から語法迄が似ていると、錯覚するのでもあろうか？

「何処どこの学校に行ってるの？」

「早稲田です」

「するとあなたは大学生？」

「はい」

と白い皮膚の顔を私の方に向けながら、笑いながら答えている。

「あの――、道は御存じですか？」

「ええ、知ってますよ。前に一遍来たことがあるんですから」

「では私、そこのお店でちょっと用を足して来ますから」

一枝ちゃんはお辞儀をすると、菓子屋の店先の方に入っていた。

坂道をダラダラ登る。鳥居があった。この鳥居をくぐるのか、右にそれるのか、もうすっかり道を忘れてしまっている。

しかし尾崎さんは、代々の神主だったではないかと、ようやくそのところに気がついて、私は同行の二人に、その鳥居をトントンと叩いてみせながら、梅林に沿う道を登って

いった。

左手に紅殻べんがらを塗った長い板塀がつづいている。便所から富士が見える家だったから、としきりに富士の姿を探したが、木立が重なり合って、富士の姿など何処どこにもなかった。考えれば、あの時は冬だったし、今は夏である。

キョロキョロと、表札を覗き覗き歩いていると、当の尾崎さんが、門口の木立の前に立っていた。辺りの葉の照り返しからか、蒼ざめた顔である。が、特徴のある笑顔になった。汽車の時刻を考えて、迎えに立ってくれたわけだろう。真サラの浴衣ゆかたである。

「いらっしやい」

と肯うなずいて、

「さあ、どうぞ」

「一枝ちゃんと同じ汽車らしかったですね。駅前で呼びかけられてびっくりしましたよ。僕の恋人だと云ったって、不思議じゃない位の大ききなもんですから——」

尾崎さんが当惑したように笑っている。

それにしても汗ばんだ。ダラダラとゆるい坂だと思っていたのに、息切れする程の道だった。

私は遠慮なく建て増された客間の方に上っていった。奥さんがバケツに水を汲んできてくれる。その水を柄杓ひしやくごと一杯飲んで、ようやく人心地がついた。私一人裸になる。

どうも何から話し出していいかわからない程御無沙汰に過ぎた感じで、しきりに酒が飲

みたくなってきた。

バンサインを肴さかなにしながら、今日だけは己おのれの禁を破るつもりである。

この日頃、私もひとかどの病人気取りで、原稿なぞ懶なまけているが、尾崎さんの顔の色をじっと見てみると、私の方はまるで仮病のような後めたさが感じられてきた。

「たしか、尾崎さんも胃潰瘍いはいようだった筈ですね」

「そう。それに肋間神経痛ろつかんしんけいつうだから」

尾崎さんはそう云って、右肱うでを上げながら、右の肋骨の辺りを、自分で抱き取るようにしてみせた。

もう何年の療養生活になるだろう？　ほかの人なら兎に角も、絶えず人と飲み歩くのが好きな、あのシタタカな酒呑童子しゅてんどうじが、じっと下曾我の病室にこもりきりになってしまったのは、どれ程氣づまりでもあり、淋ししいことだろうか。

尾崎さんと云えば、昔は、洒落しやれの好きな、義に勇む、腕うでっ節の強い、鎌倉時代の坂東武士ばんとうにでも逢うような、心地がしたものである。

酔ってはいよく、二の腕の力コブシを見せられたが——腕相撲が自慢であった。

志賀さんもまた大変強いそうで、その志賀さんとやって勝ったとか負けたとか、そんなことを聞いたような記憶もある。

「でも、起きてていいんですか？　何だったら休んでくれませんか」

「いや——、今日は調子がいいんで、少しいけないと思ったら勝手に寝ますから」

やがて、奥さんの手づくりの料理が運びこまれ、ビールになった。尾崎さんはそのビールをチビチビと甜めるようにして飲んでゐる。

私もまた、はかばかしく飲めないから、飲みさしては注がれ、飲みさしては注がれ、いたずらにビールの泡の散ってゆく有様を眺めながら、今昔の感に耐えぬのである。

昭和八年だったから、もうおっつけ二十年前だ。私は本郷の下宿を引きはらって、今、東映に居る坪井与と、満洲で死んだ内田辰次と、それに水田三郎の四人で、上落合の宏荘な家を借りたことがある。

土地は三百坪余り。建坪も三四十坪はあったろう。瀟洒な赤瓦文化住宅で、庭に三本の巨大な柿の木があった。

東京の郊外の家で、今日でも泉水のある家が果して何軒あろう？ その家には、その——泉水迄が設けられていた。

「そいつは素晴らしい家だ。借りようではないか——」

と誰が云いはじめたことであつたか、もう忘れた。

とうとう借りてしまったから不思議である。家賃は四十五円。敷金が、三つ。

当時の物価はビールが一本三十銭見当だったと思うから、今のビール百三十円は、当時のビールの四百倍。ビールなみの計算でゆくなれば、その家賃は実に一万八千円というところだ。